

「家庭科」学習を高校での必修に

岡田正章

学校での教育、教育内容は、子どもの興味・学校の自主性にもとづいて、できるだけ自由に行うことが望ましいと考えられる。そうした見解が一般化してきているなかで、ある学習を義務づけようとする主張は、時代錯誤的なものとのそしりを免れないのかも知れない。にもかかわらず、敢えて、高等学校の生徒すべてに、男子、女子の何れに対しても、家庭についての学習を必修とさせたいという願いが大きい。しかも、その声を、今、とくに大きく出し、理解あるひとびとにもその実現を期したい。

というのは、いま、高等学校の教育課程が改訂されるべく、文部大臣の諮問機関において審議されているさなかにある。かつ、従来の「家庭一般」など家庭科に関する科目が、女子だけに必修となっていたのが、男女平等の理念にもとづいて適切でないと言われ、女子も希望するものだけが選択履習すればよいとの意見が出されている。こうした状況に照らし、いささか我田引水的な感はあるが、何故、表題のような主張をするかについて、以下

に述べてみたい。

賛否両論の入り乱れたなか、やや強引な形で特設された首相直轄の臨時教育審議会は、四月に第二次答申を出している。そのなかで、家庭教育の意識を、次のように力説している。「いじめ、校内暴力、少年非行などの教育荒廃の背景には、学校教育にかかわる問題などとともに、家庭教育の役割が十分に果たされていないというゆゆしい問題がある。

今日、子どもたちの心の荒廃を克服していくためには、乳幼児期に親と子の基本的な信頼関係（親子の絆）を形成するとともに、その上に立って適時・的確なしつけを行い、自己抑制力、他人に対する思いやりなどを身に付けさせることが大切であるが、これらは親が果たすべき重大な責務である。（以下略）」

こうしたことができるためには、PTA活動の活性化、学校教育活動への地域住民参加の推進などが望まれるとともに、「親となるための学習を充実する。この観点から家庭科学を見直す」ことが必要であるとし、そのことを、次のように説明している。

「将来、よき家庭人となるために必要な心、知識、技術が習得できるよう、年齢段階に合った学習の内容や方法を検討する。すなわち、親およびこれから親となる者を対象とする学習の機会の充実を図る。学校教育においても、家庭科の位置づけや内容などを中心に、健康教育、徳育に関連する他の教科等との関連を含め見す。」

ここでも、学校教育における家庭科の見直しが求められている。しかし、それをどのようににするかについては、言及されていない。果して、どの学校段階で、親としての役割、

責任について理解を深める学習が可能となるのであろうか。また、その内容は如何なるものが適切なのであろうか。

筆者は、大学で、十年前までは一般教育科目の教育学で、その後は今日に至るまで専門教育科目の幼児教育学で、前者は一年生、後者は二年生を対象に教授してきている。両授業とも、乳幼児期における人間形成とくに家庭における親子関係が、人間の生涯にとって如何に重要であるかについて講義している。

受講する学生は、前者は選択科目で、人文学部だけでなく、理工学部の学生が年々多かった。後者は心理教育学科教育学専修コースの必修である。何れも男子と女子とが同数位で、教育学は、三クラスに分け、総数約千人が受講していた。

これらの学生が、乳幼児期が人間として育つ基礎であること、家庭における親子関係がきわめて重要な影響を及ぼすものであることをきき、これを理解し、選択科目であるにもかかわらず、年々受講生が増し、理工学部の学生間には、「あの授業を聞いていると、すぐくためになる」との評が広まったと聞いた。「ためになる」という考え方には気をつけねばならないが、このことは、この年齢段階では、家庭、夫婦、親子ということがらについて、自分自身の問題として考えることのできる状態があらわれていると思われる。

高等学校生徒は、年齢的にはやや低いが、わが国における共通教育の最終コースとして、国民として共通に望まれることながらを学習しておくことが望まれる。かつ、さきの大
学一年生とほぼ同様に、家庭の在り方について身近な問題として考えることができるよう

に思われる。

また、いわゆる家庭科は、食物・衣服・住居などの在り方について学ぶというよりは、むしろ、家族の在り方とくに家族における人間関係とりわけ親子関係の子どもに及ぼす影響について基礎的な理解と強い関心をもつようにすることが緊要である。

しかも、それは単に母親の役割が大きいということではなく、父親には父親としての固有の役割があり、両者が協力してそれぞれの役割を適切に演ずることによって、家庭の幸せ、健全な子育てがもたらされるものであることを理解するようにする。

したがって、新しい内容の家庭科は、男子・女子何れの生徒にとっても、幸せな家庭を創り、人間性豊かな子どもを養育する社会的な役割を演ずることができるよう、その学習を必修とすることが望まれる。

また、家庭科の学習の過程において、幼稚園・保育所・乳児院など幼少な子どもがいる施設に実習的に体験学習することは、単に頭だけで理解することにとどまることなく、主体的に自らの力とすることに大きな意義があることであろう。今日、ほとんどの子どもたちも、一人っ子もしくは二人きょうだいで幼ない子どもとのふれあいが乏しいことから陥る自己中心的な生活態度を改めることにも役立つであろう。ただ、これらを適切に指導できる教授者の養成も新たな課題となるが、それらをものりこえ、よき人づくりのわが国としたい。

(明星大学・宝仙学園短期大学)